

第 I 群 座長のまとめ

東 北 大 耳鼻咽喉科

高 坂 知 節

本群では各種薬剤のネブライザー療法における基礎的検討結果が報告された。

- 1) 石塚らは、日常臨床で広く使用されているヒスタグロビンネブライザー療法の安全性を検討する目的で、ハートレー系モルモットにモルモット γ グロブリンで調整した 0.0375% ヒスタグロビンを 1 日 8 回超音波ネブライザーにて連続投与し局所に与える影響を組織学的に観察した。その結果、軽度の炎症細胞浸潤、浮腫、線毛の膨化様変化、短小化などが認められたが、対照群（生食液）と比較して差異はなくモルモットヒスタグロビンネブライザー療法は、日常臨床用量の約 400 倍の投与にもかかわらず粘膜への直接的障害性はほとんど無いことが判明した。また、Schultz-Dale 反応および同種 PCA テストによる抗原性試験でも感作は認められなかったという。
- 2) 中澤らは、アミノ配糖系抗生剤エクサシン[®]の局所粘膜への影響を基礎的に調べた。ハートレー系モルモットの気管をリング状に採取し培養液中で 48 時間培養の後 incubate しながら粘膜表面を倒立位相差顕微鏡にて観察した。エクサシン[®]を 2%、5%、7%（pH 未調整）で暴露すると直後に繊毛運動が低下し、2%では 15 分後に回復するが、5%では 1 時間後、7%では 30 分後に運動は停止した。エクサシン[®]暴露後に buffer 液による洗浄を行うと障害性発現が延長した。また pH を 7.4 に調整すると未調整に比して障害性が発現しにくくなった。
- 3) 西澤らは、BALF 中の好酸球活性酵素促進因子遊離に対する WP-871 の抑制能をみる実験を行ったが、理論が先行しているわりに実験によって得られたデータの具体性を欠き、説得力に欠ける発表となった。いずれにしても、プレリミナリー研究ということなので、次回の発表を期待したい。
- 4) 喜多らは、インターフェロン（IFN）の経鼻体内吸収の可能性を探る目的で、2-5A 合成酵素活性を経時的に測定し検討した。4 名のボランティアに 100 万 IU のエアロゾル化 IFN を吸収させたところ血中 IFN 活性は検出されず、また間接的証明である 2-5A 合成酵素の上昇も認められなかった。しかし 100 万 IU / 0.2 ml に調整したものを 0.1 ml ずつ両鼻腔に点鼻した場合には酵素活性の上昇が認められた。本実験で使用した IFN は α 型のため分子量は 21,800 ~ 21,000 となりエアロゾルでの吸収は難しいが吸収促進のための工夫などによって経鼻投与の可能性が開かれる可能性が示されたという。